

氏 名 (本 籍) <sup>なめ</sup>滑 <sup>かわ</sup>川 <sup>みち</sup>道 <sup>お</sup>夫 (秋田県)

学 位 の 種 類 教 育 学 博 士

学 位 記 番 号 博 乙 第 42 号

学 位 授 与 年 月 日 昭 和 55 年 10 月 31 日

学 位 授 与 の 要 件 学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当

審 査 研 究 科 教 育 学 研 究 科

学 位 論 文 題 目 明 治 大 正 作 文 綴 方 教 育 史 研 究

主 査 筑波大学教授 湊 吉 正

副 査 筑波大学教授 教育学博士 高 久 清 吉

副 査 筑波大学教授 鈴木 博 雄

副 査 筑波大学教授 佐 藤 泰 正

副 査 筑波大学教授 高 森 邦 明

副 査 筑波大学教授 教育学博士 福 沢 周 亮

副 査 筑波大学教授 梶 哲 夫

## 論 文 の 要 旨

本論文は、第一部・第二部・第三部の三部から構成されている。

第一部は、日本作文綴方教育史（明治篇・大正篇）序説，第二部は、日本作文綴方教育史 1（明治篇），第三部は、日本作文綴方教育史 2（大正篇）からそれぞれ成立している。

第一部〔日本作文綴方教育史（明治篇・大正篇）序説〕では、「一 時代の区分と展望」「二 成立経過について」「三 先行文献」「四 『明治篇』『大正篇』の力点」の四項につき記述されているが、これは、第二部〔日本作文綴方教育史 1（明治篇）〕・第三部〔日本作文綴方教育史 2（大正篇）〕の内容を総括し、本論文作成の意図、そこで扱われた対象の範囲、その特質・意義等につき説明を加えたものである。

本論文の第二部・第三部においては、わが国の主として明治期・大正期における作文綴方教育の近代化過程を歴史的に省察し、現代作文教育の進むべき指標と問題点を探究することが課題として設定されている。そして、この課題にもとづき、本論文の第二部・第三部は、明治大正のそれぞれの時期における作文綴方教育の理論と実践を探究・開発した先覚者たちの業績をさぐり、それを歴史的発展過程の中で位置づけようとの意図のもとに作成されている。

以上のような課題と意図に導かれつつ、本論文では、次のような史的展望にもとづく時代区分が設定されている。

一 型式主義作文期 1872～1898 (明 5～31)

1 前期 1872～1889 (明 5～22)

学制作文期 漢語作文期 読み書き一体期 文範模倣期 書牘・日用文期 語学論理期 作文教授法出現期

2 後期 1890～1898 (明 23～31)

読書作文期 幼・少年文範期 美辞・修辭作文期 作文教授法探究期 課題作文期

二 自由発表作文期 1899～1912 (明 32～45)

自由発表提唱期 国語科教授法探究期 言文一致綴方期 自作法形成期 修辭学導入期

三 写生主義綴方期 1912～1917 (明<sup>4 5</sup><sub>大 1</sub>～大 6)

写生主義提唱期 随意選題提唱期 教授法革新期 自己表現主張期

四 文芸主義綴方期 1918～1929 (大 7～昭 4)

「赤い鳥」綴方期 童謡・児童自由詩開始期 生活指導台頭期 自由作強調期

五 生活主義綴方期 1930～1939 (昭 5～14)

六 皇国主義綴方期 1940～1945 (昭 15～20)

七 戦後作文期 1946～1957 (昭 21～32)

以上のような史的展望のもとに、本論文においては、一～二 (明治期)、三～四 (大正期) が考察の対象とされ、論述が進められている。全体を通して、「概観」によって作文綴方教育思潮の流れを叙述し、代表的著作を取り上げ、その「解題」と「意義」を通じてそれをめぐる作文綴方教育に言及するという方法が採用されている。

まず「一 型式主義作文期」においては、著者は、前後期を通じてこの時期の中心的な作文活動が、文章表現のパターンを各種「文範」の読解記誦によって学び、その模倣を媒介として自己表現への道程をたどることにあつた点を、広く諸資料を渉猟しながら実証している。また特に、近代の学校作文教授が出現し、その方法の探究が推進されていく過程を丹念に探究している。

次に、「二 自由発表作文期」においては、まず型式模倣の文範主義への批判を打ち出した上田萬年の『作文教授法』(明 30・10 富山房)の歴史的意義をみとめている。また特に、自由発表主義の作文教授を主張した樋口勘治郎の『<sup>統合</sup>主義新教授法』(明 32・4 同文館)について、芦田恵之助の「随意選題」や同時代の「自由選題」の綴方教授に与えた影響を確認し、さらに「生活綴方」の源流をそこに求める立場を表明している。新生綴方教授研究が全国的にわきあがっていく状況も明らかにされている。

「三 写生主義綴方期」においては、著者は、自然主義文学における写生主義的傾向が綴方教育に反映していく過程、特に言文一致体の写生文が取り入れられていく過程を、駒村徳寿・五味義武等の諸著作の検討を通して追跡している。また、『綴り方教授』(大 2・3 香芸館)等の吟味によって芦田恵之助の随意選題論の成熟の過程が浮彫りにされている。さらに、ドイツの作文教授を紹介

した保科孝一の『<sup>最近</sup>綴り方教授の新潮』(大4・6 同文館)の歴史的意義を確認し、新綴方教育論を提唱した浅山尚『綴方教授の破壊と建設』(大4・7 隆文館)等の業績を発掘している。

「四 文芸主義綴方期」においては、作家鈴木三重吉による「赤い鳥」(大7・7創刊)の綴方及びその選評を通して、綴方教育の上に文芸的リアリズムが導入されていった過程、また協力者の詩人北原白秋等によって創作童謡・児童自由詩が全国的に広がっていった過程がくわしく探索されている。「随意選題か課題か」の芦田対友納の論争(大10・1)をめぐる綴方教育界の状況も、諸資料の綿密な検討を通して明確に把握されている。さらに、東京高師附属小学校国語研究部員(主任丸山林平)の共同討議によってまとめられ発表された「綴方指導の根本方針十箇条」(大12・5)が「生活の表現」「生活の指導」を公認した点で画期的な意義をもつことが明らかにされているが、同時にそれが、田上新吉の『生命の綴方教授』(大10・10 目黒書店)等の普及とあいまって、綴方教育界が「生活の表現」時代に入ったことの徴憑としてみられるべきことも明らかにされている。そして、やがてこの時期が、昭和期、なかんずく「生活主義綴方期」へと展開していく状況が実証されているのである。

さて、作文綴方教育史研究は、国語教育史成立のための基礎作業の一つであり、それは、近代学校成立以来の学校教育における作文・綴方の文章表現指導史を中核として構成されるべきものである。本論文においても、そこを中核として全体が構成されているが、しかし同時に、著者は、そこに深くかかわる諸領域、すなわち作文・綴方の作品史(教材史)、近代文芸思潮史、文章史・文体史・国語国字運動史、学校外の作文事象史等の面にも着眼しつつ、さらに一般教育思潮史や法規的推移の面にも目を配りつつ、非常に広い視野に立って本論文の全体をまとめあげている。

## 審 査 の 要 旨

本論文は、「ひろく日本人の思考認識とふかく関わる文章表現活動の歴史であり、文化史でもある」(第二部・序・2頁)のような明治大正作文綴方教育史を構成しようとする著者の基本的なかまえにもとづいて作成されている。著者は、このような基本的なかまえのもとに、多年にわたり、中央・地方の学校教育関係のもののみならず文学・ジャーナリズム・その他文化一般にわたる膨大な量の文献・資料を収集・探索し、それらを一つ一つ書誌的に精査・検討し、さらに整理・類別・評価するという作業を積み重ねてきた。本論文は、このような基礎的作業の集積体として成立したものである。

したがって、本論文の随所に、新資料の発掘、資料の新しい歴史的位置づけが見いだされ、また例えば樋口勘治郎の業績に「生活綴方」の源流を見る提言など、創見が多くみとめられる。ただ一方において、事象の歴史的展開についての分析的、体系的把握にもとづく真に本格的な通史としての記述のレベルに達していない部分も指摘されうる。しかし、この分野の先行研究に対して、本論

文は、その文化一般を見通す視野の広さと実証的な手堅さにおいて際立っており、独創的な研究成果として評価されうるものである。国語教育学界、さらには教育学界に寄与するところ多大なものがあるとみられる。

よって、著者は教育学博士の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。